

| | | | |
|---------------|---------------------------------------|------|--------|
| 派遣者番号 | 31K12 | 氏名 | 大江 瑞穂 |
| 研究主題 —副主題— | これからの小学校英語教育の在り方 —インプットと言語活動の視点から— | | |
| 派遣先 | 東京学芸大学 教職大学院 | 担当教官 | 粕谷 恭子 |
| 所属 | 東久留米市立第五小学校 | 所属長 | 小瀬 ますみ |

キーワード：小学校英語 外国語活動 インプット 言語活動 授業改善

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

急速なグローバル化により新しい時代を生きる子供たちにとって、英語でコミュニケーションをとることの重要性は増し、英語教育を取り巻く環境は大きく変化している。2020年度4月からの新学習指導要領全面実施に伴い、小学校高学年では教科として外国語科の授業が年間70時間、中学年においては外国語活動の授業が年間35時間行われる。

小学校現場では、この全面実施に向け様々な研修が行われ、担任教師の英語の授業に関する意識が少しずつ高まってきている。しかし実際の現場では、ゲームや意味の理解が伴っていない活動で授業が終わり、「児童一人一人が主体的に、生きた英語を学び使っているのか」という疑問や児童の英語に対する学習意欲の低下等の課題が挙がってきている。

では、今後小学校の英語の授業はどうあるべきなのだろうか。教科化されるからといって知識の詰め込みになったり、中学校での授業スタイルの前倒しになったりしては、児童の学習意欲を削いでしまう可能性もある。小学校段階において特に大切なのは、「英語が分かった、伝わった」という体験を授業の中でたくさん積み、児童の英語に対する学習意欲を向上させていくことであると考え。

そこで、第二言語習得理論や先行研究から、「意味と音が結び付いた豊富なインプットを与え、本当に英語を使いたくなる目的・場面・状況が設定された意味のある言語活動を行うことで、児童が楽しさと達成感を味わい、学習意欲が向上するのではないか」という仮説を立てた。その仮説の下、授業改善と授業実践を行い、児童の変容を見取り、これからの外国語教育の授業の在り方を考え、提案することを本研究の目的とする。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 研究の流れ



【理論研究】

インプットや言語活動に関する先行研究・文献調査・教授法から小学校英語の在り方を考える。

【授業改善】

理論研究や現場の課題からインプットと言語活動の視点に立った授業改善のポイントを作成する。

【実践研究】

授業改善を取り入れた検証授業を行い、児童の変容を授業前後のアンケートで比較する。

【分析/考察】

アンケート結果の分析と考察を行う。

【授業モデルの提案】

授業モデルの提案を行う。

(2) 検証授業

- ① 参加者 都内公立A小学校4年生107名
- ② 単元 Let's Try! 2(計13時間)
Unit 5 「Do you have a pen ?」
Unit 6 「Alphabet」
Unit 7 「What do you want ?」
- ③ アンケート内容・実施時期

「ア 英語の授業が好きだ」、「イ 英語の授業にすすんで参加している」、「ウ 英語の授業はよくわかる」、「エ 自信をもって英語を話すことができる」、「オ 英語が使えるようになりたい」の5項目からなるアンケートを、検証授業前9月と授業後12月に実施した。アンケートは、「1:そう思う」から「5:そう思わない」までの5件法を用いた(図1)。また、5項目では測れない児童の思いや学習意欲の変化等を知るために、自由記述欄を設けた。

| | 5 😊 | 4 🙂 | 3 😐 | 2 😞 | 1 😡 |
|----------------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| ア 英語の授業が好きだ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ 英語の授業に楽しんで参加している。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ 英語の授業はよくわかる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 自信をもって英語を話すことができる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| オ 英語が使えるようになりたい。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

図1 アンケート

④ 授業改善のポイント

従来の指導の流れは大幅に変えず、豊富なインプット及び実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を取り入れていくことで、授業改善を行う。それぞれのポイントを表1

にまとめた。

表1 インプットと言語活動の視点

| 豊富なインプットの視点 | 言語活動の視点 |
|---|---|
| ①目的・場面・状況を設定した実際のやり取りを通して、意味が推測できるインプット。 ②目標とする身に付けさせたい英語表現は、目的を変えて何度も聞かせるインプット。 ③児童の発言を正しく繰り返しながら聞かせるインプット。 ④一単語一単語ではなく、チャンクである「言葉の塊」を聞かせるインプット。 ⑤英語特有の音やイントネーションに慣れさせるためのインプット。 | ①身近で簡単な事柄に関する短い話を聞いておおよその内容を理解する活動。 ②自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、好みや要求などの自分の気持ちや考えなどを伝え合う活動。 ③「実際に、英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」ためのスモールステップ。 ④児童が「伝えたい、聞きたい」という思いを抱くための設定。 Meaningful な活動 |

3 研究の結果

(1) アンケート結果

対応のある *t* 検定の結果、情意面 (ア・イ)、授業に関する理解度 (ウ・エ) の4項目で有意差がみられた (表2)。また、全ての項目で検証授業後のアンケートの方が、肯定的なグループ (「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」) の人数が増加した。有意差が出なかった「オ 英語が使えるようになりたい」の項目は、授業前後どちらも9割近くの児童が肯定的なグループであった。

表2 アンケート5項目 *t* 検定結果 (pre-post)

| 項目 | 前後 | 平均値 | 標準偏差 | <i>t</i> 値 | <i>p</i> 値 | 効果量 |
|----|------|------|------|------------|------------|------|
| ア | Pre | 3.93 | 1.01 | -6.61 | .000** | 0.66 |
| | Post | 4.50 | .70 | | | |
| イ | Pre | 3.80 | 1.05 | -6.90 | .000** | 0.63 |
| | Post | 4.38 | .64 | | | |
| ウ | Pre | 3.79 | 1.21 | -4.64 | .000** | 0.45 |
| | Post | 4.29 | .98 | | | |
| エ | Pre | 3.07 | 1.28 | -5.70 | .000** | 0.51 |
| | Post | 3.68 | 1.13 | | | |
| オ | Pre | 4.61 | .87 | -1.00 | .320 | 0.1 |
| | Post | 4.69 | .70 | | | |

p < .001**

(2) 自由記述分析

児童の振り返りから得られた自由記述データを KH Coder を用いて、検証授業前後の抽出語彙及び記述の特徴を調べた。表3に抽出語彙の上位5位までを示した。検証授業後【Post】では、「～たい」という願望より、「言える」と言う語が2位にきており、英語が言えるようになったと感じている児童が増えていることが分かる。また、5位の「楽しい」(頻度21)は、検証授業前【Pre】では12位(頻度5)であった。「友達に好きなピザを言えたのが楽しかった」、「歌やチャンツを歌うのが楽しい」、「買い物すごく楽しかった」など、一人一人楽しいと感じているところに違いはあるが、授業やアクティビティなどの楽しさや相手に伝わったことへの楽しさを感じる児童が増えていた。

表3. 児童の自習記述データからの抽出語 (上位5位まで)

| 児童の振り返り【Pre】 | | | 児童の振り返り【Post】 | | |
|--------------|-----|----|---------------|-----|----|
| 順位 | 頻出語 | 頻度 | 順位 | 頻出語 | 頻度 |
| 1 | 英語 | 66 | 1 | 英語 | 91 |
| 2 | ～たい | 31 | 2 | 言える | 75 |
| 3 | 言える | 29 | 3 | ～たい | 31 |
| 4 | 知る | 18 | 4 | ○学期 | 25 |
| 5 | 天気 | 12 | 5 | 楽しい | 21 |

また、自由記述を一つ一つ分析していくと、授業前後で特徴が見られた。特に、検証授業後の方が、授業を通して言えるようになった喜びやリスニングに対する手応え、英語をもっと使ってみたいという意欲を記述した児童が多く見られた。

4 研究の考察

豊富なインプットと“Meaningful”な言語活動の視点に立って授業改善を行ってきた。インプット量を増やすことで児童が飽きてつまらなく感じてしまうのではないかという懸念もあったが、インプットを増やすことで楽しさや英語への手応えを感じている児童が増えた。ただ聞かせるだけの一方的なインプットではなく、やり取りを通じた実際の場面を想定したインプットがプラスに働いたことが一要因として考えられる。また、本当にその言葉が使われる目的・場面・状況が設定された中で言語を使用していったことで、英語をもっと使いたいという意欲をもつ児童や実生活と結び付ける児童も増えた。

今後の課題は、児童にどのような英語力が付いたのか具体的に分析し、中学校への接続を円滑に行えるようにすること、そして、自信がもてない児童や理解が深まらない児童に対する個別支援を視野に入れ、更なる授業改善をすることである。

5 今後の展望

今回の課題研究をふまえ、表4にインプットと言語活動の視点に立った授業モデルをまとめた。今後も、目的・場面・状況が明確な言語活動や豊富なインプットを通して児童に生きた英語を身に付けさせ、もっと英語を使ってみたいという意欲がもてるような授業を計画し、小学校外国語教育の推進に寄与していく。

表4 インプットと言語活動の視点に立った授業モデル

| | 授業の流れ | インプット | 言語活動 |
|-----|--------------------------------|---|--|
| 導入 | Greeting | ・天気/曜日/体の調子など。 | ・挨拶や自分の体の調子を伝える。 |
| | Warm up 歌/Small Talk 等 | ・帯活動で歌を取り入れ英語特有の音に慣れ親しませる。 | ・Small Talk では既習事項を使い、自分の好きななどを伝え合う。 |
| 展開 | Introduction 本時の導入 めあて等 | ・教師自身の気持ちや考えをターゲットセンテンスにのせた意味が推測できるインプット。 | ・身近で簡単な事柄に関する短い話を聞いておおよその内容や話し手の考えや気持ちを理解する活動。 |
| | Practice 復習 新出語句 の確認等 | ・単語のみではなく、やり取り中で「言葉の塊」である文で聞かせる。 ・目的/場面/状況を変え身に付けさせたい英語表現を何度も聞かせる。 | ・身近な内容に関する簡単な質問に答えさせたりするなどの活動。 ・聞く/話す双方の言語活動を取り入れられる。 |
| | Activity | ・児童の発言をやり取りの中で正しく直しながら聞かせる。 | ・児童の興味関心を考慮した互いの考えや気持ちを伝え合う活動。 ・目的/場面/状況を設定した活動。 |
| まとめ | Reflection 振り返り | ・やり取りの中で、本時で扱った表現を聞かせる。 | ・復習として、自分の考えを黑板から選び発話する。 |
| | Closing 歌 絵本 あいさつ等 | ・終わりの歌や絵本、アルファベットの認識など帯で英語特有の音のインプットを入れる。 | |